



学校教育目標：心豊かな子 たくましい子 自ら学ぶ子



「オノマトペ」

教頭 塩谷 潤

校庭の木々の葉が色づき始め、朝、夕の涼しさに秋の深まりが感じられてきました。スポーツの秋、読書の秋、芸術の秋と言われるように、何をするにも絶好の季節となりました。先日の公開音楽会では、多くの保護者・地域の方々にお越しいただき、温かい励ましと拍手をいただきありがとうございました。

さて、最近、鉄棒で遊んでいる子どもを多く見かけるようになりました。補助具を自分達で用意し、「だるま回り」「地球回り」「後方支持回転」等楽しそうに回っています。私が子どもの頃、友達と競い合いながら難しい技に果敢に挑戦したことを思い出します。体育で鉄棒の授業を見てみると、教師の「つばめでピタッ」「くーるん、くーるん」など指導の言葉が聞こえてきます。このようにその場その時の雰囲気や様子を相手に分かり易く伝える言葉「オノマトペ」が最近、注目を集めているようです。

国語辞典には、オノマトペとは、「擬音語」と「擬態語」を包括的に指した言葉を指し、日本語では擬音語と擬態語を合わせて「擬声語」と呼ぶことがあるが、語源はフランス語だと記されていました。また、オノマトペは物事の声や音・様子・動作・感情などを簡略的に表し、情景をより感情的に表現させることのできる手段として用いられており、私達の生活は数限りないオノマトペを利用することによって成り立っているとも補足されていました。

日本語は、他の言語に比べて音節、つまり音のかたまりの数が圧倒的に少ないため、オノマトペが多いです。食べ物（食感）に関するオノマトペはゆうに100種類を超え、世界一の数として認定されているようです。（もちもち・とろとろ・さくさく・あつあつ・ねばねば・ねとねと・しゃきしゃき・・・）また、日本語は他の言語に比べて動詞や形容詞が少ないため、擬音語や擬態語が発達して幅広い表現ができるようになりました。もしオノマトペを使用せずにその時の状況や情景を表そうとすれば、必要以上に複雑多岐な言葉を用いることになり、的確に伝えることができるか心配になります。一方、オノマトペを乱用すると正確な言葉の衰退につながるという懸念の声も耳にします。

最近科学技術の急速な発展により、情報伝達が容易になりました。その代表格が瞬時に伝わるメール。中でも、無料通話・メールアプリLINE（ライン）は、24時間、いつでも、どこでも、無料で好きなだけ通話やメールができます。メールは、自分の思いや考えを絵文字や省略した文字で表現することがあり、カタカナで書かれた文字や発せられる言葉は、時として感覚だけで使われることがあります。これは、幼児が祖父母を「ジージ」「バーバ」と言うのと似ています。幼いときは可愛らしい表現ですが、大人がはっきりした言葉遣いをせず感覚だけに頼って伝えるとしたら貧弱な表現感覚と捉えられても仕方ありません。

正確な言葉が存在するのであれば、その言葉を大切に用い、日本語独特の奥深い意味合いを味わってほしいと願います。